

## 西新地区元寇防塁発掘調査報告書

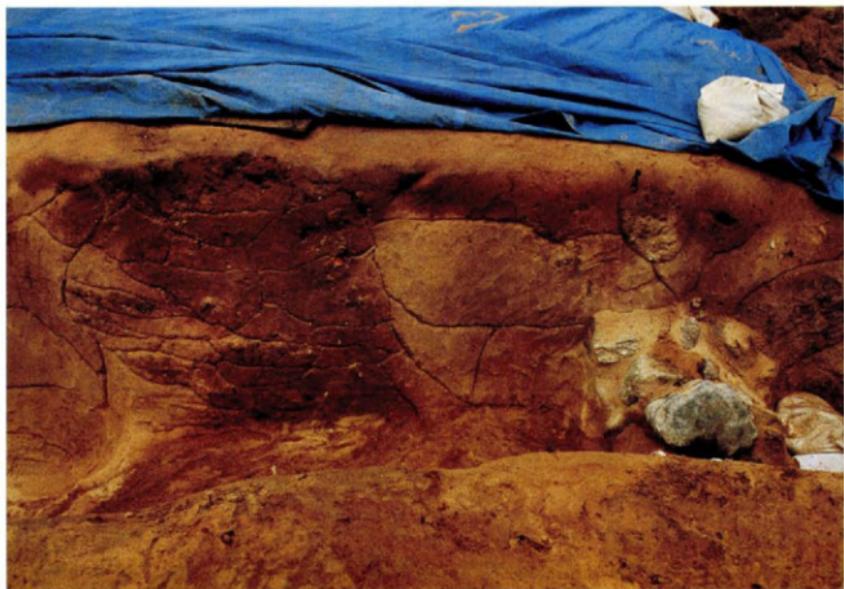


2002

福岡市教育委員会



Ph. 1 石塁西側部分（西から）



Ph. 2 第1トレンチ西壁土層断面（東から）



Ph. 3 第2トレンチ東壁土層断面（西から）



Ph. 4 土壌縦断面土層（南から）

## 序 文

13世紀の後半に、アジアから東ヨーロッパにかけて広大な世界帝国を築き上げたモンゴル王朝は、名を元と改め、当時の日本に二度にわたって襲来しています。いわゆる「元寇」とよばれるこの戦いは我が国の基盤をゆるがす歴史的大事件でした。当時の鎌倉幕府は文永の役とよばれる第1回目の襲来の後で、博多湾岸に石築地の建造を命じています。これが現在私たちが見ることのできる「元寇防壁」です。この遺跡はある意味で福岡という地が対外交渉の窓口であったことを物語る貴重な遺跡として認められ、その一部は国指定史跡として保存されています。

本書はこの、元寇防壁第8次調査について報告するものです。今回調査を行った地点は西新地区の国指定史跡地区に隣接する場所で、調査の結果従来より知られている石積みによる防壁遺構の他に、土塁状の遺構も検出されました。このような防壁の形態はこれまでに出土例がなく、その機能については現在もなお検討の余地が残されています。

本書が文化財保護への御理解と御協力を得られるとともに、学術研究資料の一環として御活用いただけましたら幸いと存じます。

なお、今回出土した遺構については、西南学院大学をはじめとする関係各位の御協力により学内に移設され、さらに石塁を築造当時の形で復元していただきました。福岡市でも、このような重要な文化遺産については積極的に保存、活用の道を探っていく方針ですが、今回の場合はそのモデルケースともいいうことができます。

最後になりましたが、事前協議、発掘調査から移築保存、本書の刊行に至るまで、多大な御協力を頂きました学校法人西南学院の方々に対しまして、心より謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会  
教育長 生田征生

## 本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
第2章 調査の背景	2
1. 遺跡立地	2
2. 歴史的背景	2
3. これまでの発掘調査	2
第3章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 石塁	6
3. 上堀	11
4. 周辺遺構との位置関係	16
5. 出土遺物	17
第4章 調査の総括	18
1. 土塁の断面形状について	18
2. 他地区の防塁との比較検討	19
3. 石塁と上堀の関係	20

## 挿図目次

Fig. 1 調査地点位置図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区全体図 (1/100)	5
Fig. 3 石塁西側部分実測図 (1/40)	7
Fig. 4 石塁南側部分基段部平面実測図 (1/40)	8
Fig. 5 土塁実測図 (1/100)	12
Fig. 6 1トレンチ・3トレンチ土塁断面実測図 (1/40)	14
Fig. 7 2トレンチ土塁断面実測図 (1/40)	15
Fig. 8 土塁縦断面実測図 (1/40)	15
Fig. 9 土塁突出部実測図 (1/40)	6
Fig. 10 調査区周辺位置図 (1/2,000)	17

## 図版目次

表紙 調査区全景 (北西から)	
Ph. 1 石塁西側部分 (西から)	卷頭
Ph. 2 第1トレンチ西壁土層断面 (東から)	卷頭
Ph. 3 第2トレンチ東壁土層断面 (西から)	卷頭
Ph. 4 土塁縦断面土層 (南から)	卷頭
Ph. 5 調査区全景 (北から)	6
Ph. 6 石塁南側部分1	7
Ph. 7 石塁南側部分2	7
Ph. 8 石塁南側部分3	7
Ph. 9 調査区全景 (西から)	9
Ph. 10 石塁北側部分 (北から)	9
Ph. 11 石塁部分全景 (西から)	10
Ph. 12 石塁南側部分全体 (西から)	10
Ph. 13 調査区全景 (東から)	11
Ph. 14 第2トレンチ東側土層断面 (北西から)	13
Ph. 15 第1突山部 (西から)	13

## 表目次

Tab. 1 元寇防塁発掘調査一覧	4
Tab. 2 使用石材材質別一覧	8

## 例 言

1. 本書は西南学院大学校舎増築に先だって、福岡市教育委員会が平成11年9月21日から11月5日にかけておこなった元寇防塁第8次調査の調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は大塚紀宣、新郷英弘（西南学院大学院生）、山田ヤス子によって行われた。
3. 本書に掲載された遺構写真の撮影は大塚が行った。
4. 本書に掲載した挿図は大塚が行った。
5. 本書で使用した方位は一部を除いて磁北を用いており、真北から $6^{\circ} 21'$  西偏する。
6. 本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
7. 本書の執筆・編集は大塚が行った。

# 第1章 はじめに

## 1.調査に至る経緯

平成10年（1998年）9月22日付けて、福岡市早良区西新6丁目2番10号 学校法人西南学院 理事長伊藤隆夫氏から、早良区西新6丁目798番地の1他地内における大学校舎増築に伴う埋蔵文化財事前審査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。

これを見て、埋蔵文化財課では工事予定地が元寇防塁の推定線上に位置し、さらに西側に隣接して元寇防塁史跡指定地も存在することから、遺構が遺存している可能性があると判断し、既存校舎の解体をまって、翌平成11年（1999年）9月2日に試掘調査を実施した。その結果、土壌状の粘土堆と石列を検出した。この試掘結果をもとに、現地では防塁に関する遺構が遺存しているものと判断し、遺跡の取扱について関係者と協議を重ね、新校舎の工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲について埋蔵文化財本調査を実施することとなった。同時に、遺構が良好に遺存していた場合、その保存についても協議を行うことで同意した。

本調査は平成11年9月21日から開始し、同年11月5日に終了した。

## 2.調査組織

調査委託 学校法人西南学院 理事長 伊藤 隆夫

調査受託 福岡市 市長 山崎広太郎

調査主体 福岡市教育委員会教育長 西 憲一郎（前） 生田 征生（現）

調査総括 文化財部長 柳田 純孝

埋蔵文化財課長 山崎 純男

埋蔵文化財課調査第1係長 山口 讓治

調査庶務 文化財整備課管理係 宮川 英彦

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 大塚 紀宜

調査作業 新郷 英弘（西南学院大学大学院） 一宮 義幸 岩見 敏子 牛尾興志輔

海津 宏子 川島ツキエ 菊地 昭一 菊地 栄子 倉光 政彦 稲所 通泰

高橋 茂子 鶴田 佑子 土斐崎季子 中園登美子 土生ヒサヨ 土生ヨシ子

広瀬 梢 細川 友喜 堀 ウメコ 松本 藤子 満田 雅子 三好 道子

山尾タマエ 山口タツエ 山田ヤス子

なお調査の段階で、西南学院大学名誉教授 唐木田芳文氏 西南学院大学教授 高倉洋彰氏 西南学院大学助教授 磯望氏の各先生方より多大な御教授、御協力を頂きました。また、調査中に学校関係者、施工責任者である九州建設株式会社、福岡市博物館、埋蔵文化財課の諸氏より多くの協力を頂きました。この場をお借りして感謝の意を申し上げます。

## 第2章 調査の背景

### 1. 遺跡立地

西新地区の元寇防塁は旧国道202号線（現在は市道千代今宿線）の北側に平行する形で延びていることが現在までに確認されている。現在の海岸線は埋め立てによりはるか北側に位置しているが、昭和50年代後半までは防塁の北350mに海岸線があり、百道砂浜として海水浴客を集めていたことで知られている。防塁が位置する付近も戦前までは周囲は松林で、防塁はこの海岸線に平行に位置し、中世から最近までの地形の変化が砂丘の堆積作用によるもののみであることを示している。

西新地区には東西に平行に3本の砂丘が堆積することが地質調査の結果から分かっている（\*1）。防塁が位置する砂丘はもっとも海岸寄りの砂丘にある。西新町遺跡として知られる、弥生時代～古墳時代の集落、甕棺墓の立地する砂丘はこの南側で、遺跡の範囲は修猷館高校付近を中心南北両側に帯状に広がる。砂丘の形成過程と遺跡の年代からみて、古墳時代までの海岸線は防塁線の南側に位置し、鎌倉時代後半までに新たに形成された砂丘上に防塁が築造され、その位置は当時の海岸線にほぼ一致するものと考えられる。

### 2. 歴史的背景

1274年（文永11年）と1281年（弘安4年）の2度にわたって、元の軍勢が日本に来襲する、蒙古襲米とも呼ばれるこの事件は、当時の日本にとって政治、経済、文化の各方面にわたって影響を及ぼすものであった。政治的には鎌倉幕府の権力がこれを機に衰退し初め、その一方で武家勢力が公家勢力を完全に圧倒するものともなった契機である。文化的には「神風」「神國思想」の起源となり、その後の歴史上の各場面の基底に潜在することとなった、以後の国内史に大きく影響を及ぼすものである。

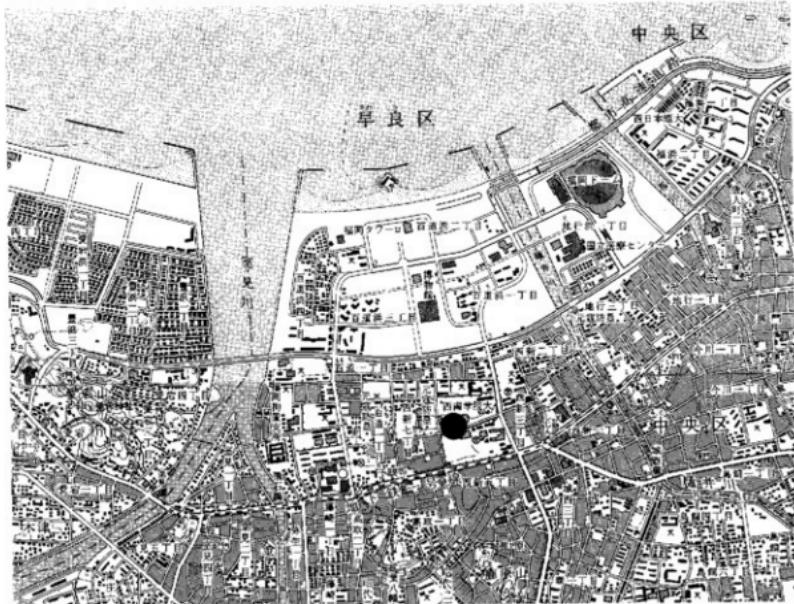


Fig. 1 調査地点位置図 (1/25,000)

この蒙古襲来の時に、元軍の上陸を阻止する目的で博多湾岸に作られた石塁が現在「元寇防壁」と呼ばれているもので、総延長は約20kmに及ぶ。築造は1276年（建治2年）3月から8月までの間で、このときは九州各地の御家人が動員されて地区ごとに分担して工事を行っている。この、築造当時は「石築地」と呼ばれた防壁は1281年の2度目の襲来の時に元軍の上陸を妨げ、結果としてと防御線として大きな効果があったといわれている。

現在では博多湾岸に点在して遺存している防壁のうち、7地区を国指定史跡として保存整備している。そのほかに発掘調査の際に元寇防壁とみられる遺構が次々と確認されている。（\*2）

### 3.これまでの発掘調査

2002年3月まで福岡市教育委員会で実施した元寇防壁に関する発掘調査は9次におよび、その内容はTab.1の通りである。しかしこれ以前にも数回にわたり、調査、報告が行われており、特に、本格的な発掘調査が行われる以前から防壁の寸法、内部構造について詳細な報告が行われていることは、以前からこの遺跡に関する関心が高かったことを伺うものである。

西新地区では今回の発掘調査以前に福岡市教育委員会による2度の発掘調査が行われている。1970年（昭和45年）に、今回調査地点の西側に隣接する国史跡指定地内の防壁の史跡整備を目的として、幅2mの sondage（ sondage）を設定して調査を行っている。その結果、石積みの構築技術と、内部主体の粘土、砂の堆積状況を、化学的考察も駆使して分析している。2回目の調査は1996年（平成8年）におこなわれた共同住宅建設とともに調査で、藤崎地区に近い地点で防壁の石材が散布している状況を確認している。

その他の地区で行われている調査結果については第4章で考察も交えて紹介する。このほかに、博多湾岸の各所で元寇防壁やこれに類する資料が出土しており、それらの資料によって防壁の位置、構造が随分明らかとなっている。

\*1 下山正一・磯望・野井英明・高橋潔・小林茂・佐伯弘次「鳥飼低地の第四紀層と地形形成」小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰『福岡平野の古環境と遺跡立地』1998

\*2 博多小学校の新設に伴う埋蔵文化財発掘調査（博多灘跡群第111次調査、1998年～1999年調査実施）で、幅3.3～3.5m、長さ53mの連続した石壁遺構が検出された。出土遺物からみて元寇当時の築造の可能性が高いが、不明な点も多く現段階では元寇防壁と断定していない。

### 参考文献

『生の松原元寇防壁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集 福岡市教育委員会 1968

『今津元寇防壁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡市教育委員会 1969

『西新元寇防壁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡市教育委員会 1970

『国史跡 元寇防壁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集 2001

『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.8 1993年度 福岡市教育委員会 1995

『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.11 1996年度 福岡市教育委員会 1998

西園龍三・柳田純孝『元寇と博多』「真で読む蒙古襲来」2001

柳田純孝『元寇防壁と博多の沿革』『古代の博多』九州大学出版会 1984

## 第3章 調査の記録

### 1.調査の経緯・概要

調査地点は西南大学構内南側に位置する。現在西南大学南東側に元寇防壁史跡指定地区が存在するが、調査地点はその東側延長部分にあたる。調査以前は南側道路から1.5mほど高い土手状の地形となり、旧校舎が東西方向に伸びる形で建てられていた。この土手状の地形は校舎建築以前の古い時期の地図にも記載されており、防壁に伴うものであることは容易に推測された。ただし、この土手状の地形の北側は旧校舎の建築の際に地下げ、破壊を受けており、現に当時東側にすでに建築されていた新校舎の建築の際の試掘では防壁遺構は検出されておらず、遺構自体の遺存状況が懸念されていた。

試掘の結果から、土塁状の地形の内部で粘土堆積物、石材が検出され、防壁遺構の一部が遺存している可能性が高いと判断され、本調査の実施に踏み切った。

調査の結果、設定した調査区の北半では防壁に使用した石材が散乱し、一部原位置で積み上げられた状態で遺存している状況が確認できた。また調査区の南半分では砂と粘土を互層に積み上げた土塁が検出されたが、調査の結果、この土塁と北側の石塁は一体のものではなく、時期が異なる別個の構築物であることが判明した。土層の堆積状況からみて、土塁が石塁の構築時期より以前に作られていることが前後関係として判明している。

出土遺物は少なく、全体で30片の土器・陶磁器片が出土しているが、大部分が近世以降のもので、一部古墳時代の遺物も含まれるが、防壁の時期にあたる遺物は全く出土しておらず、中世にこの地点で人為的な營みが継続していた痕跡はない。

なお、今回設定した調査区より東側部分は既に造成による地下げを受けており、遺構は遺存しないものと考えられるが、西侧部分については、遺構が連続して続くものと考えられる。

Tab. 1 元寇防壁発掘調査一覧

調査年月日	調査地点	調査概要	調査次数	参考文献
1968.3.1～3.15	生の松原	九大社と市教委との合同調査。防壁線の復元・構造・石材产地を調査。砂利と瓦砾岩を使用し、表面を粘土と砂で被覆する。	1	「生の松原元寇防壁発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集、福岡市教育委員会 1968
1969.8.19～9.14	今津	九大社・山政委の合併調査。防壁線の復元・構造・石材产地を調査。玄武岩と花崗岩を使用し、石間に内削構造が異なる。	2	「今津元寇防壁発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集、福岡市教育委員会 1969
1970.1.19～8.15	西新	防壁の復元工事と防壁の合併調査。トンネル調査で、砂利間に基礎工事を施行した後で被覆する。石壁内側は粘土と砂の互層。	3	「西新元寇防壁発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集、福岡市教育委員会 1970
1978.10.19～10.30	姪浜 (駒地区)	特定地区内の複数調査。基壇部と3～6段の石垣を検出する。石垣内部は石が充填され、粘土は不使用。基段高は4mと多い。	4	柳田耕寧「元寇防壁と博多の地形」『古代の博多』九州大学出版会 1984
1993.5.13～5.31	箱崎	仮設敷設路設に伴い、史跡地区内地の踏査を行う。防壁の石材を検出する。検出石材は少數で、原形をとどめない。	5	『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.8 1990年度、福岡市教育委員会 1996
1996.12.26	芦道	共同住宅建設に伴う調査。防壁の石材を検出する。石材位置は原位置とどめず、敷在する。	6	『福岡市埋蔵文化財年報』VOL.11 1996年度、福岡市教育委員会 1996
1998.5.5～8.24	生の松原	斜面整備に伴う調査。石積みと背面の構造の確認をおこなう。背面の構造は砂と粘土の互層。	7	『国史跡：元寇防壁（生の松原地区）復元・修復報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集、2001
1999.9.21～11.5	西新	校舎建設に伴う調査。石壁と土壁の2種類の遺構を検出する。	8	本齊
2000.9.4～9.11	箱崎	仮設敷設路設に伴う調査。	9	

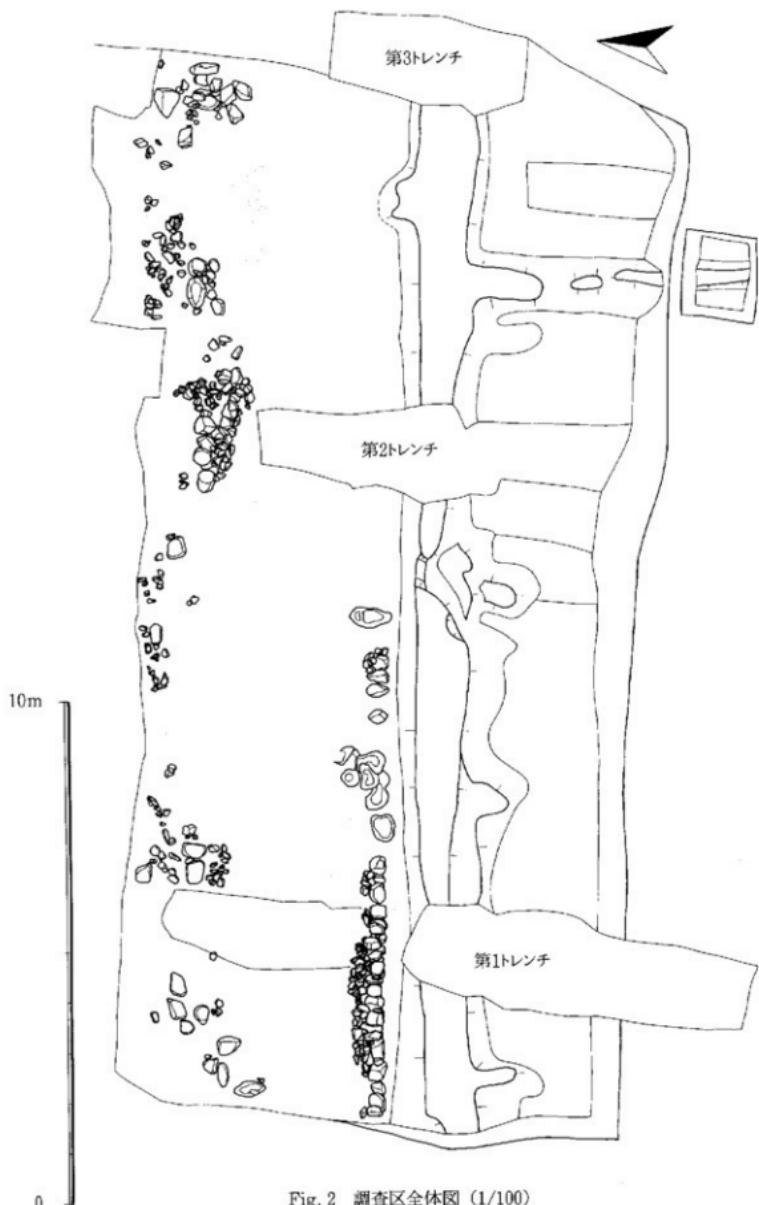


Fig. 2 調査区全体図 (1/100)



Ph. 5 調査区全景（北から）

前面に石列、その向こうに土塁の高まりが東西に連なるのが確認できる。

## 2.石塁遺構

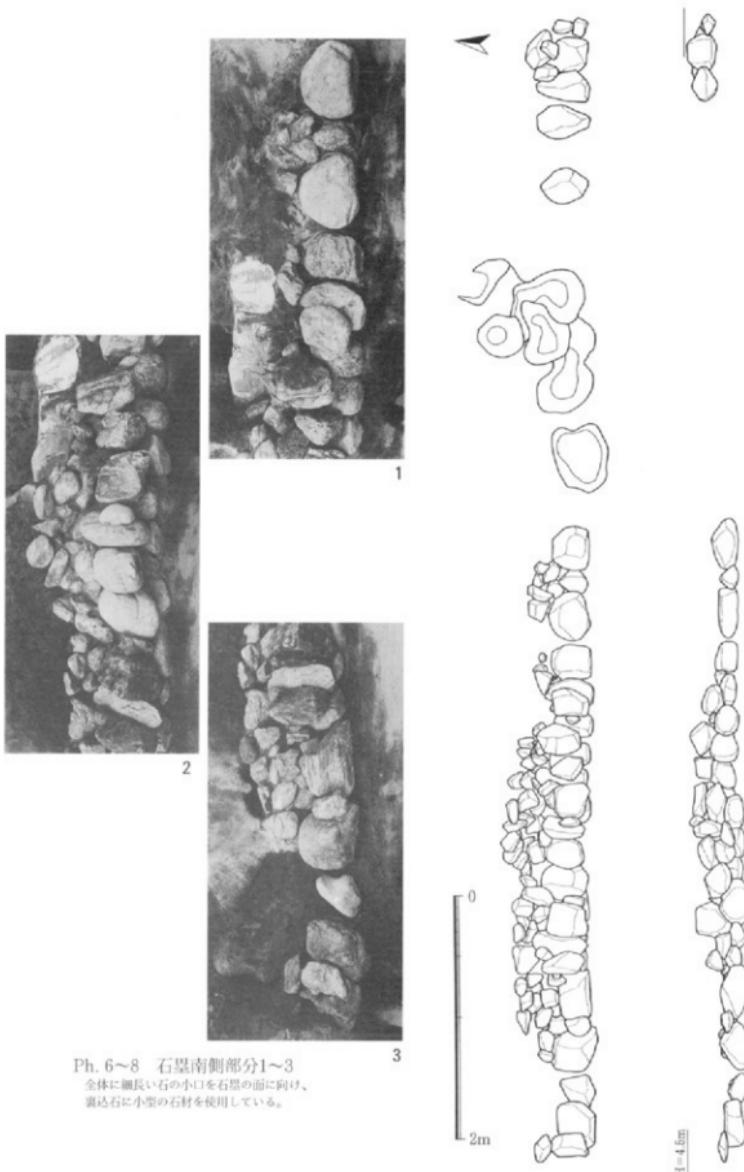
**概要** 調査区の北側半分で防壁に伴う石材と、調査区西側部分で防壁の後面に該当する部分の積石を検出しており、元寇防壁として考えられている石塁の一部とみられる。

北側は既存の建物が位置していたため、その基礎により、地表面から1mまで建物基礎による破壊を受けており、調査時に基礎による擾乱部分を除去した時にその下層で砂丘層とその上面に広がる石材を検出している。したがって石材の遺存状況は悪く、最下部の基段部分及び、築造時の地表面レベルにある石材しか遺存しない。南西部分は比較的遺存状況がよい。南東部分は既存の建物基礎により、完全に失われている。

使用されている石材は栗石を主に使用しており、切石は全く使用されていない。砂丘基盤の上に粘土を貼って地盤を安定させ、一段目に扁平な石を使用して根固めを行い、2段目以上にやや小型の石を積み上げている。

**北側部分** 北側部分に散在する石は、大きさではほぼ2種類に大別でき、50~60cmの大きなものと、10~20cmの小さなものに分けられる。大きなものに属する石材は、ほぼ同一直線上に並ぶように位置しており、石塁前面基段部分に位置していたものと考えられる。同時に、この同一直線が本来の石塁前面線として推定できる。比較的小さな石は大きな石を中心として分散して位置しているが、これらは本来裏込めとして用いられていたものと考えられ、石塁の破壊に伴い、分散したと考えられる。

細かい部分で観察を進めていくと、北東隅部分では比較的大きな石材が集中するが、南北方向に細長い形状の石以外の石材は原位置から動いていると推測される。調査区東端から2m付近に位置する石材群のうち、大きな石材2個は原位置を留めた基段部分の石材と推測され、その南側に接する小石材群も裏込め石として原位置に近い位置にあるものと見られる。その西側、調査区東端から7m付近に比較的密集して石材が遺存する部分は既存建物の基礎の隙間に位置していたために、遺存状況が比較的良好である。北側前面に5個の大きな石材が東西方向に並び、南側に小さな石材が裏込めとして積まれている。裏込め石のうち、一部は前面に崩れ落ちており、石塁崩壊の様相をうかがうことがで



Ph. 6~8 石塀南側部分1~3  
全体に細長い石の小口を石塀の面に向け、  
裏込石に小型の石材を使用している。

Fig. 3 石塀南側部分実測図 (1/40)

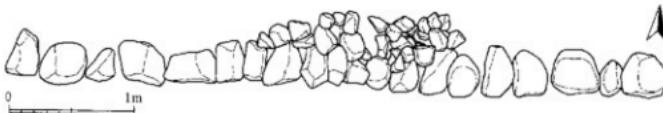


Fig. 4 石塁南側部分基段部平面実測図 (1/40)

きる。大小の石材の接する部分は大きな石の隙間に小さな石が入り込んで組まれた状況が見られ、裏込め石によって前面の大石を固定するように積み上げられた状況が推定できる。その西側は8mにわたって石材が遺存しない部分が続くが、これは既存建物の基礎が深かったために石材が完全に失われたためである。その西側、1トレンチ東側部分では大きな石2個を中心南北両側に小石材が散布する状況であるが、南側の石材は裏込め石として原位置に近い状況、北側の石材は崩れ落ちた石材と考えられる。1トレンチ西側に散布する石材はいずれも大きく、石塁前面に使用された石材と考えられるが、原位置を留めている確実な石材はないと思われる。

**南西部分** 石塁後面で遺存する石材は南西側で集中的に検出されており、この部分では積まれている石材が1~3段で良好に遺存する状況が確認できる。北側前面と同じく、大小2種類の石材に分類することができるが、大きな石材は北側のものと比べて一回り小さく、30~40cmのものが主体である。

石塁外面は石の面をそろえており、石垣状に整然と積み上げられていたことを伺わせる。平面では外面はほぼ直線上に並び、東側に間隔をおいた石材群もこの直線上に並んでいます。この中間に不整形の掘込みが見られるが、形状から見て石材の抜き取り痕と考えられ、これらが一体の構築物だったことが考えられる。また外面の石材は基段部の石材がその上の石材よりも若干大きめのもので構成され、石材上面も基底部分の砂を掘込むことで同じレベルに揃えるよう調整されている。また基底部分に使用されている石材の形状も、比較的平たい石を使用しており、上に乗せる石を安定されることを考慮している。

裏込めの石材は、基段部分よりも一段高い部分から積み上げられている。このことは構築順序としまず基段部分の石材を並べて根固めを行い、その後裏込めと上段の石材を積み上げたものと考えられる。また、検出された裏込め石の範囲よりも内側は搅乱によって破壊されており、さらに内側まで裏込め石の範囲が広がる可能性がある。また小石材は裏込めだけではなく、外面の大きな石材の隙間において石を固定させるためにも用いられている。

基段部分の石材は、外面、上面を揃えているだけでなく、平面的にはほぼ同じ大きさの石を通しておらず、奥行き20cm前後の幅で基底石が並んでいる。形状も扁平な形のものを中心に揃えており、基底部を構築する際に具体的な使用方法、石塁のなかでの位置関係等を考慮した具体的な石材の選別が行われていたことが推察される。

**石材材質** 使用されている石材は栗石状の自然石を使用しており、人為的に切り出した切石は全く使用されていない。本米の位置を留めているとみられる石について石材を分析したところ、Tab.2のような結果となり、蛇紋岩が多数を占め、蛇紋岩、角閃石を合わせた割合は80%を超える。このような状況からみて、塩基性変成岩を産出し、海岸部のような栗石形の自然石を産するような地点、という条件を満たす石材採取地として、今津の毘沙門山東側の海岸である可能性が高いとおもわれる。(\*)

\*1 石材の材質、石材採取地については西南学院大学名誉教授 唐木田芳文先生に御教授頂いた。

Tab. 2 使用石材材質別一覧

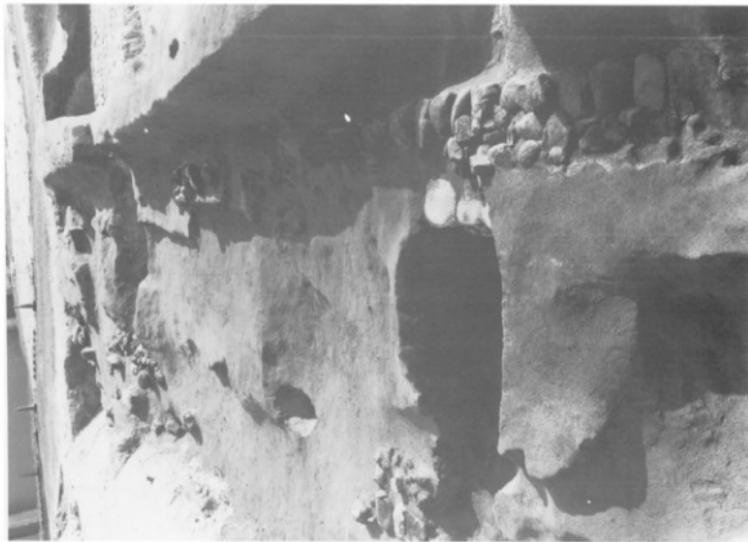
材質	個数	比率
蛇紋岩	45	54.2
角閃石	29	35
玄武岩	7	8.4
緑色片岩	1	1.2
花崗閃綠岩	1	1.2
計	83	100



Ph. 9 調査区全景（西から）  
西側ほど石壙の遺存状況が良好である。石壙と土壙はかなり近接する位置にある。



Ph. 10 石壙北側部分（北から）  
手前の大きな石材が前面の基段と考えられる。



Ph. 11 石壁部分全景（西から）  
南側の石列は直角に延び、北側に平行して立石と石材が残る。



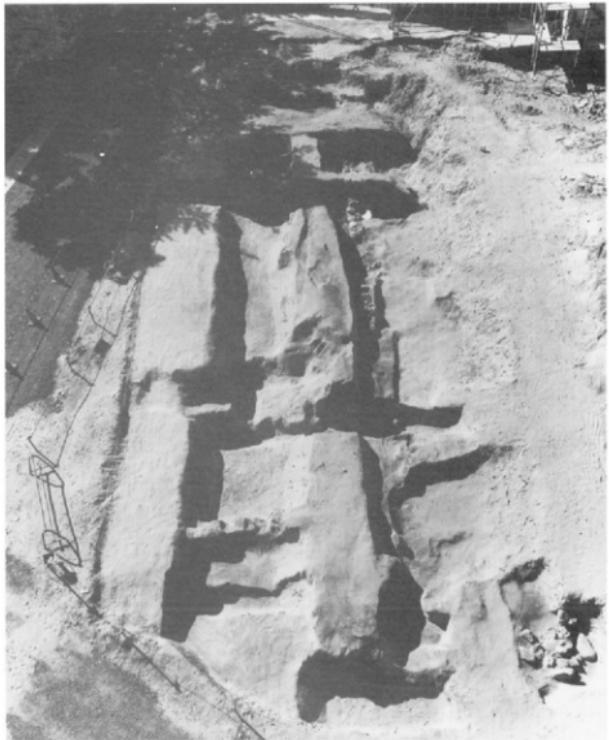
Ph. 12 石壁前面部分全体（西から）  
石壠の頭を整然とそろえ、溝込石を支えている柱體で極出される。

### 3.土壠

**概要** 石壠遺構の南側に接して土壠遺構が検出された。検出当初は、石壠の内部主体の一部との認識で調査を進めたが、石壠全体が検出された時点では石壠とは全く別個の遺構であることが判明し、土壠遺構として説明する。

土壠は調査区の東西に延びる形で間断なく遺存する。石壠と土壠の間隔は約50cmで、空隙には風成砂が堆積している。構造は砂丘基盤の上に粘土、砂の混合土を突固めて基礎を築いてから上部に粘土と砂を交互に重ねて固めて積み上げていて、断面で粘土と砂の細かい互層構造がみられる。土壠南側側壁には数箇所にほぼ等間隔に突出部が存在する。この突出部も構造は土壠本体と同じ、粘土と砂の互層構造になっている。

**平面** 平面形態は幅2m~3mで、全体を通じてほぼ同一幅で構築されている。検出した部分のうち、調査区中央部付近は擾乱により原形を留めていない。土壠南側の部分は本来の土壠部分と、スロープ状の斜面部分に分けられ、スロープ状の斜面部分は本来人為的に構築したものか、風成砂による自然堆積によるものか不明確で、両者の可能性を考え、平面図としてスロープ部分を含めた図面(Fig.5上)と、土壠互層積み上げ部分(Fig.5下)の両方を提示する。土壠中軸線は直線状に延び、両側壁も直線的に平行に延びている。この土壠中軸線は石壠の方向とはほぼ平行に延び、両者が無関係ではないことがうかがえる。



Ph. 13 調査区全景（東から）  
土壠は調査区の東西にわたって連続している。

北側側壁はほぼ直線で延び、東側の一部が既存の建物基礎で崩されている他は緩い凹凸が見られるものの、ほぼ直線といつよい。

南側側壁もほぼ直線的に延びるもの、3箇所で土壠中軸方向から直交方向に突出する部分があり、うち1箇所は調査区南側外部にまで延びている。調査区中央部分で一部突出した形状を呈する部分があるが、これは擾乱によるものである。

**断面形態** 土壠本体の断面は台形を基本とした形態を呈しているが、数カ所の横断トレーニによって若干の形態の変化が見られる。これは築造当時の様相を表わしているものと、築造後に改変を受けた可能性を示しているものの二者がある。

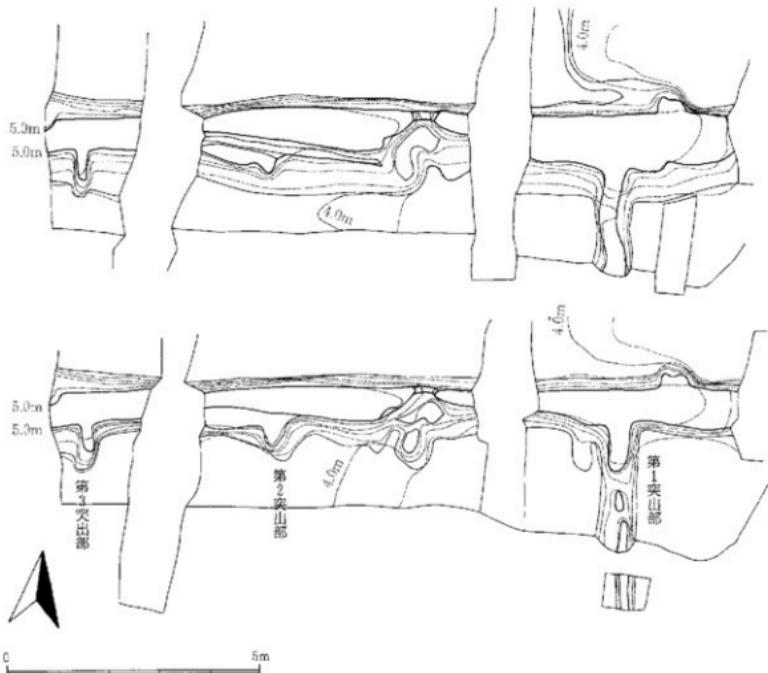


Fig. 5 土壌実測図 (1/100)

土壌前面は各断面ともほぼ垂直に傾斜する。土壌後面については本体部分が緩いスロープ状になっているもの、垂直に立っているもの、側壁下部がオーバーハング気味にえぐれているものがある。また、十型後面のスロープ状の部分はいずれも自然堆積に似た角度で緩く傾斜をもって形成されている。

**土層（横断・縦断）** 土壌本体の土層は基本的に砂、粘土を細かい層で積み上げる互層構造で構成されている。使用されている粘土は花崗岩風化バイラン土を使用しており、緻密で粘性が高い。砂は風成砂で、自然堆積しているものとはほとんど変わらない。粘土と砂を混合している層もみられる。

1トレント西側壁面上層では基盤面を若干掘込んで、粘土層と砂層を交互に積み上げて構築している。一見版築に似た形態だが、版築ほど層が整っておらず、層の厚さも一定ではない。粘土層は土壌の比較的前面に積み上げられ、特に下層に粘土層が集中する。特に土壌基盤部前面はほとんど粘土で固められており、上層は粘土と砂の混合層と砂層の互層となる。土壌後面の砂層は土壌方向から緩く傾斜して堆積しており、特に34・35層は土壌頂部から傾斜している。南側側壁下部はやや内側にえぐれており、その部分を充填するように36~38層が堆積する。

3トレント西側壁面では、本来の土壌層が南側ではほとんど崩れしており、前面の粘土・砂混合層による壁面付近だけが遺存している。層位は比較的厚い層が堆積しているが、遺存状況が悪いために詳細に観察ができないこともあり、さらに細分ができるものとみられる。使用されている土の種類は粘土を主としており、硬く縮まっている。基盤面の15層は粘土を使用しており、基礎を固めているものと見られる。南側は砂層が自然堆積に近い形で水平に堆積する。

2トレント東側壁面では、土壌内部は他の部分と同様に粘土と砂の互層で構成される。粘土が多く使用されている部分は、土壌下部の中心部分と、前面の石壌基盤部分とみられる部分である。前面砂層は土壌の前面で土壌を被るような風成砂層の堆積が見られるが、土壌前面2mの地点で、土壌基盤



Ph. 14 第2トレンチ東側土層断面（北西から）  
色の濃い部分は粘土を多く含む層で、土壠本体を構成する。



Ph. 15 第1突出部（西から）  
土壠本体と同じく、粘土と砂の互層構造が確認できる。

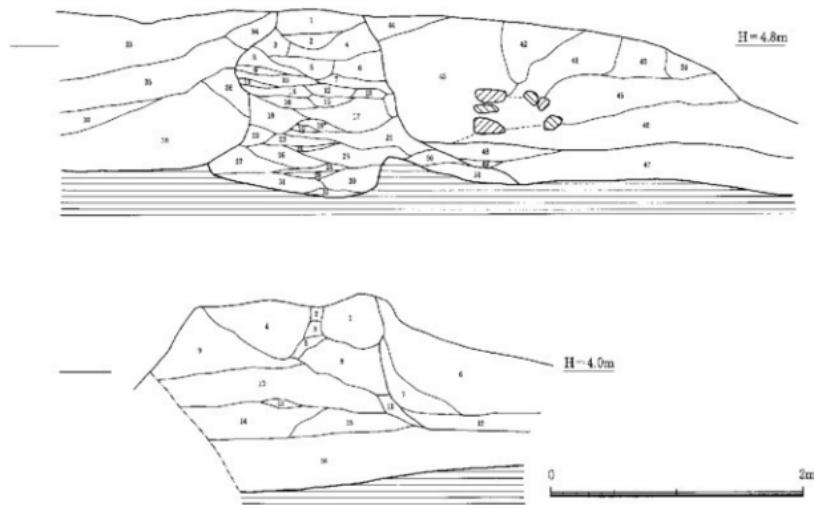


図6-1 第1・第3・第4・第5・第6・第7・第8・第9・第10・第11・第12・第13・第14・第15・第16・第17・第18・第19・第20・第21・第22・第23・第24・第25・第26・第27・第28・第29・第30・第31・第32・第33・第34・第35・第36・第37・第38・第39・第40・第41・第42・第43・第44・第45・第46・第47・第48層

- 1 砂質土 削り落とし面。
- 2 砂質土 削り落とし面。
- 3 砂質土 削り落とし面。
- 4 砂質土 流動化層をノック材に含む。
- 5 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 6 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 7 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 8 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 9 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 10 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 11 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 12 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 13 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 14 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 15 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 16 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 17 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 18 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 19 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 20 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 21 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 22 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 23 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 24 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 25 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 26 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 27 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 28 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 29 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 30 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 31 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 32 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 33 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 34 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 35 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 36 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 37 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 38 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 39 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 40 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 41 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 42 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 43 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 44 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 45 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 46 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 47 砂質土 有機物質をノック材に含む。
- 48 砂質土 有機物質をノック材に含む。

図6-1 第1・第3・第4・第5・第6・第7・第8・第9・第10・第11・第12・第13・第14・第15・第16・第17・第18・第19・第20・第21・第22・第23・第24・第25・第26・第27・第28・第29・第30・第31・第32・第33・第34・第35・第36・第37・第38・第39・第40・第41・第42・第43・第44・第45・第46・第47・第48層

- 1 砂質土 削り落とし面。
- 2 砂質土 削り落とし面。
- 3 砂質土 削り落とし面。
- 4 砂質土 削り落とし面。
- 5 砂質土 削り落とし面。
- 6 砂質土 削り落とし面。
- 7 砂質土 削り落とし面。
- 8 砂質土 削り落とし面。
- 9 砂質土 削り落とし面。
- 10 砂質土 削り落とし面。
- 11 砂質土 削り落とし面。
- 12 砂質土 削り落とし面。
- 13 砂質土 削り落とし面。
- 14 砂質土 削り落とし面。
- 15 砂質土 削り落とし面。
- 16 砂質土 削り落とし面。
- 17 砂質土 削り落とし面。
- 18 砂質土 削り落とし面。
- 19 砂質土 削り落とし面。
- 20 砂質土 削り落とし面。
- 21 砂質土 削り落とし面。
- 22 砂質土 削り落とし面。
- 23 砂質土 削り落とし面。
- 24 砂質土 削り落とし面。
- 25 砂質土 削り落とし面。
- 26 砂質土 削り落とし面。
- 27 砂質土 削り落とし面。
- 28 砂質土 削り落とし面。
- 29 砂質土 削り落とし面。
- 30 砂質土 削り落とし面。
- 31 砂質土 削り落とし面。
- 32 砂質土 削り落とし面。
- 33 砂質土 削り落とし面。
- 34 砂質土 削り落とし面。
- 35 砂質土 削り落とし面。
- 36 砂質土 削り落とし面。
- 37 砂質土 削り落とし面。
- 38 砂質土 削り落とし面。
- 39 砂質土 削り落とし面。
- 40 砂質土 削り落とし面。
- 41 砂質土 削り落とし面。
- 42 砂質土 削り落とし面。
- 43 砂質土 削り落とし面。
- 44 砂質土 削り落とし面。
- 45 砂質土 削り落とし面。
- 46 砂質土 削り落とし面。
- 47 砂質土 削り落とし面。
- 48 砂質土 削り落とし面。

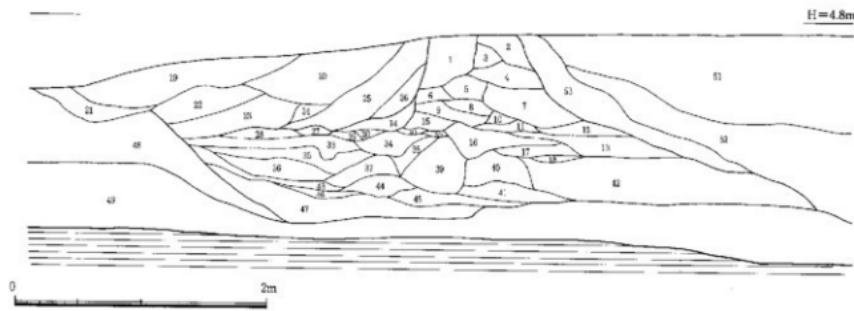
Fig. 6-1 Trench 1・Trench 3・Trench 4・Trench 5・Trench 6・Trench 7・Trench 8・Trench 9・Trench 10・Trench 11・Trench 12・Trench 13・Trench 14・Trench 15・Trench 16・Trench 17・Trench 18・Trench 19・Trench 20・Trench 21・Trench 22・Trench 23・Trench 24・Trench 25・Trench 26・Trench 27・Trench 28・Trench 29・Trench 30・Trench 31・Trench 32・Trench 33・Trench 34・Trench 35・Trench 36・Trench 37・Trench 38・Trench 39・Trench 40・Trench 41・Trench 42・Trench 43・Trench 44・Trench 45・Trench 46・Trench 47・Trench 48

面から盛り上がる層がみられる(48層)。砂に粘土ブロックが混入していることから、土壌築造時以降の堆積とみられる。おそらく、築造時の作業工程上堆積したものと考えられるが、1トレンチではみられないことから、土壌前面に連続して堆積したものではないと考えられる。49、50層は風成作用による水平方向の線がみられることから、自然堆積層とみられる。後面砂層は土壌方向から緩く傾斜して堆積しており、特に53層を境に土壌内部と外部の堆積層の違いが明瞭に見られる。

縦断面の十層観察は2箇所で行っており、いずれの地点でも同様に粘土と砂の細かい互層構造がみられる。横断面土層よりも粘土、砂の各層の長さが長く、縦断面方向でレベルをあわせて積み上げていったことが推定される。

突出部 土壌南側に3箇所の突出部を確認している。東側より第1～第3まで番号を与え、各突出部の説明を行う。

第1突出部は調査区東端から5mの部分に位置する。上部を一部擾乱されるが、ほぼ良好に遺存する。長さは調査区南側まで延びており、一部拡張トレンチを設定して確認したが、さらに南側に延びる。土壌との接合部分の高さは土壌とほぼ同じ高さで、1.0mを測る。上面は南側へ緩く傾斜し、調査区南端での突出部の高さは40cmになる。幅は土壌接合部付近で1.3m、調査区南端付近で40cmとなり、



(Fig.7 2トレンチ土質断面実測図 斜町)



Fig. 7 2トレンチ土壠断面実測図 (1/40)

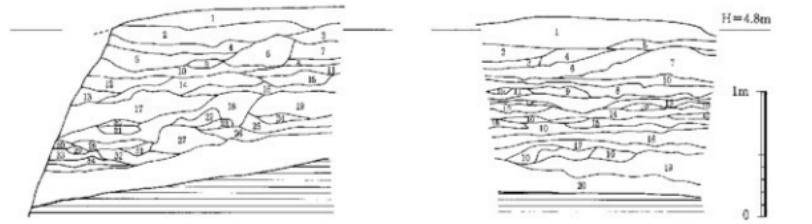


Fig. 35. 土壤剖面 2207

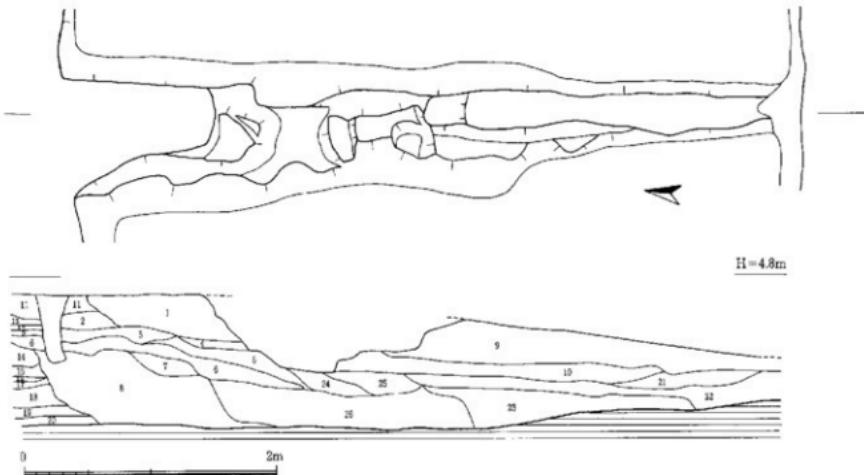
- |         |                     |          |        |         |               |
|---------|---------------------|----------|--------|---------|---------------|
| 3 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 16 緑色野菜  | 黒ごま炒め。 | 9 えんどう豆 | えんどう豆三丁炒め、堅い。 |
| 3 離乳食   | 離乳食トマトパウチ含む。混じる。    | 20 薄切り野菜 | 野菜炒め。  | 10 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮、堅い。 |
| 3 離乳食   | 離乳食トマトパウチ含む。混じる。    | 21 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 11 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 4 彩色野菜  | 緑色野菜・桃色野菜・オレンジ野菜など。 | 22 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 12 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 4 彩色野菜  | 緑色野菜・桃色野菜・オレンジ野菜など。 | 23 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 13 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 5 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 24 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 14 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 5 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 25 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 15 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 3 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 26 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 16 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 3 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 27 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 17 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 4 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 28 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 18 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 4 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 29 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 19 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 5 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 30 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 20 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 5 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 31 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 21 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 6 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 32 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 22 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 6 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 33 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 23 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 7 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 34 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 24 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 7 離乳食   | 離乳食トマトパウチを多く含む。混じる。 | 35 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 25 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 8 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 36 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 26 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 8 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 37 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 27 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 9 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 38 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 28 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 9 彩色野菜  | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 39 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 29 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |
| 10 彩色野菜 | 桃色野菜・オレンジ野菜など。      | 40 緑色野菜  | 野菜炒め。  | 30 朝日昆布 | 朝日昆布とんこつ煮。    |

Fig. 8 土壌縦断面実測図 (1/40)

南側ほど細くなる。縦断面の土層観察では、土壘と同様に粘土と砂の互層で構成されており、土壘の層と突出部の層が一部重なっており、築造時に突出部が上壘と同時に作られたと考えられる。粘土層は十畳よりも一枚の長さが長く連続している。

第2突出部は調査区東側から16mの部分に、第3突出部は21mの部分に位置する。第2突出部の長さは1mで、土壠南側斜壁から瘦中に突出する。第3突出部も同様に1.5mの長さで南側に張り出している。

この3箇所の突出部の間隔は、第1と第2の突出部が10.5m、第2と第3の突出部が5.5mで、第1、第2突出部の間隔が約2倍となっているが、この中間の部分がトレンチと搅乱で原形を留めていないため、突出部が5~6m間隔で作られていた可能性もある。



(Fig.9 土層断面 説明)

- |                              |                            |                         |
|------------------------------|----------------------------|-------------------------|
| 1 明褐色砂 稀色粘土をブロック状に多く含む。      | 10 黄褐色粘土 噴泥色粘土をブロック状に多く含む。 | 19 明褐色砂 粘土をほとんど含まず、もろい。 |
| 2 黄褐色砂 稀色粘土をブロック状に多く含む。      | 11 黄褐色粘土 噴泥色粘土を若干含む。       | 20 明褐色砂 粘土を若干含む。        |
| 3 黄褐色砂                       | 12 明褐色砂 粘土をほとんど含まない。       | 21 黄褐色砂 噴泥色粘土を若干含み、堅い。  |
| 4 黄褐色粘土上 噴泥色砂を含む。            | 13 黄褐色粘土                   | 22 明褐色砂 粘土をほとんど含まず、もろい。 |
| 5 黄褐色砂 黄褐色粘土をブロック状を若干含む。     | 14 黄褐色砂 黄褐色粘土を少々含む。        | 23 噴泥色砂 粘土をほとんど含み、堅い。   |
| 6 明褐色粘土上 稀色砂礫層じり粘土をブロック状に含む。 | 15 明褐色砂 稀土をほとんど含まず、もろい。    | 24 明褐色砂 もろく、崩れやすい。      |
| 7 黄褐色砂 稀色粘土をブロック状に含む。        | 16 黄褐色粘土                   | 25 黄褐色砂 粘土を若干含む。        |
| 8 明褐色砂 稀色粘土をブロック状に含む。        | 17 明褐色砂 粘土をほとんど含まず、もろい。    | 26 明褐色砂 粘土を若干含む。        |
| 9 黄褐色粘土上 噴泥色粘土をブロック状に多く含む。   | 18 黄褐色粘土 粘土をほとんど含まず、もろい。   |                         |

Fig. 9 上塁突出部実測図 (1/40)

#### 4.周辺遺構との位置関係

今回調査した防塁遺構と、西側の史跡指定地内に位置する防塁について、精密な測量を行い、両者の位置関係を検討した。

兩者とも海岸線に平行に位置していることは概略として把握されていたが、今回の測量で方向、距離を正確につかむことで、その中間の位置や、両方の延長線を推定するための資料とするために行っている。方法としては国土座標を用い、指定地内に現在復元されている防塁の北側、南側側壁の座標を計測し、同時に調査区内の土塁、石塁の各側壁の座標を計測して比較する

測量の結果、今回西側の防塁の直線延長線が、今回の調査区に向かっていることが確認できた。

(Fig.10) 指定地内の防塁復元部分と調査区との距離は90mで、防塁の北側側壁、南側側壁の各延長線は今回検出した土塁、石塁と方向がほぼ一致することが確かめられた。しかし、石塁の延長は土塁の位置にあたり、石塁はわずかに北側にはずれるものとみられる。

ただ、この仮定の根拠として、防塁が90mの区間に内で直線で伸び、振れることのないという前提があり、防塁が全体に緩くカーブしながら延びるような場合には適用できない。指定地内と今回の防塁とも検出部分が短く、わずかなカーブなどは検出することが難しいので、指定地内の復元防塁と一致するのが土塁部分とは断定できない。

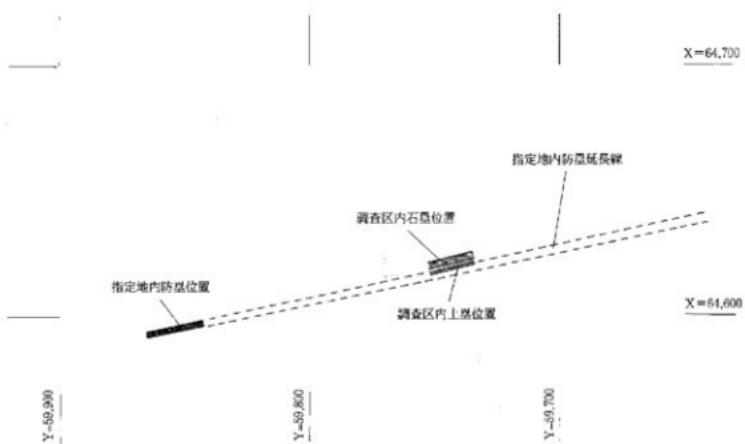


Fig. 10 調査区周辺位置図 (1/2,000)

## 5.出土遺物

調査中に出土した遺物は総量で土器・陶磁器30片のみである。うち、防壠の築造時期である中世に属する遺物は出土していない。遺物のうち、古墳時代の土師器、須恵器破片が出土しており、特に土壘内部の粘土層から出土する須恵器破片が見られたことから、粘土採取地点に古墳時代の遺跡が存在した可能性が高い。なお、出土遺物は小片で、図化不能である。

## 第4章 調査の総括

調査を通じて、新たに判明した事項やいくつかの問題点について、改めて以下で検討を行い、まとめたい。

### 1. 土壘の断面形状について

石壘に比較して、土壘の遺存状況は比較的良好で、土壘基盤から1m以上遺存しており、検出時の形状から築造時の状況や、その後の経過を考察することが可能である。

断面観察を行った3箇所の断面ではいずれも前面の傾斜がきつく、壁面がほとんど直立する形となっている。築造時にすでに前面を直立させて構築していたためということも考えられるが、そのほかにいくつかの理由が考えられる。まず、土壘構築時に、外側に木枠または石積みを築き、その内側に土壘を構築したため、前面が垂直になったというものである。ただ、土層の観察状況から見て、木枠を用いた痕跡が見られないこと、石材を用いた場合、石を外してからしばらくの間に壁面が崩壊しやすいことなどを考慮すると、この仮説は成立しにくい。

土壘を構築した後で石壘を構築したという、石壘と土壘の前後関係は後述するが、この順序で構築した場合、両者の位置関係を考えると、石壘の南側に余裕がなく、作業用や通行用のスペースがほとんどない。おそらく、石壘を構築する際に土壘の前面を削ったものと考えられる。土壘北側壁面は今回検出された形状は構築された当初の形態ではなく、後日削られて直線的に切り立つような形になつたとみられる。

また、南側の壁面は、良好に遺存していた1、2トレーナーの断面でみると、土壘下部で内側にえぐれるような形状を呈し、その部分に風成砂層が自然堆積する様相がみられる。これは、土壘後背部を砂を中心とした層で固め、粘土を用いなかったために、検出状況として砂層が土壘下部をえぐる形で認識されたものとも考えられる。この状況は2トレーナーの土層断面の状況に近い。もう一つの可能性として、本来土壘の土台部分に石を置いて構築していたものが、その後石を取り出したためにその部分に風成砂層が堆積したものとも考えられる。この場合石材を取り出した時期は、土壘後背部の風成砂層に上面から掘込んだ乱れがないことから、土壘が作られてからかなり早い段階であったものと推定される。

土壘の内部構造として、粘土と砂が互層に堆積する状況がみられる。これは「二和土」と呼ばれる伝統的工法として知られているもので、粘土と砂の二種類の土を交互に積むことで、それぞれの層同士の摩擦力により転圧効果を高め、土壘内部の排水性を確保しながら安定性を保持する構造である。

(\*) 1 今回検出された土壘では使用されている2種類の土が明確に区別される。砂は風成砂を主とした土で、風成砂とほとんど変化のない土質であるため、粘土粒を含む土質まで幅があるが、全体が粘土と混ざりあった土はない。粘土は明褐色で粘性が高く、花崗岩質の風化土とみられる。砂、粘土とも土壘に使用されている部分は硬く縮まっており、築造時に叩き締められたものとみられる。

砂については現地海岸に多量にある風成砂を用いたとして問題はない。粘土の産出地は、周辺の地質からみて、現地の南側に位置する独立低丘陵である龜原（そはら）山、皿山付近から搬入したものと考えられる。なお出土遺物のうち須恵器大甕破片が粘土塊内部から検出されており、同丘陵に位置していた古墳が防壘築造の際に破壊され、土砂（当然、石室石材も）が持ち出された可能性もある。

### 2. 他地区の防壘との比較検討

博多湾岸には、今回調査を行った西新地区の他にも防壘が遺存している、あるいは発掘調査によって防壘が検出された地点が数箇所ある。それらの地区について簡単にまとめ、今回の調査結果と比較検討を行いたい。

**箱崎地区** 現在元寇防壘が遺存していることが確認されている最も東の地点である。JR鹿児島本線の高架工事の際に調査が行われ、防壘石材が散在している状況を確認している。(2)その線路東側では大正9年に調査が行われ、現在国指定史跡指定地となっている。(3)

**博多地区** 博多地区で元寇防壘と確認できる遺構は現在まで確認されていない。博多小学校建設の際に発掘調査が行われ、東西方向に延びる幅3.3~3.5mの石積みを検出している。2~3段の石積みが

遺存しており、外面は大きめの石を積み上げ、内部は小石を充填させている。(4)立地が、当時の博多市街内でさまざまな遺構が存在している地点で、護岸など元寇防壁でない遺構である可能性も高い。

**藤崎地区** 今回の調査地点から西側に一直線に向かった地点に藤崎（百道）地区の元寇防壁指定地が位置する。現況では石墨推定部分付近が東西方向に盛り上がっており、その下部に防壁が埋没しているものと考えられる。この地区での本格的な調査は、行われていない。

**姪浜地区** 小戸の向浜と脇の2地点が国史跡指定地となっており、脇地区では昭和54年に調査が実施されている。現在の指定地の西側で石墨の基底部が3~5段確認され、基底部幅4.0mで姪浜産の砂岩を使用した石壁である。内部は石で充填され、粘土は使用されていない。(5)

**生の松原地区** 十郎川から長垂山にかけて延びる砂浜に沿って、現在でも一部が地表に露出した状況で防壁が遺存する。1968年に調査が行われ、石壁と、その背後の粘土段を確認している。石材は姪浜産砂岩と、長垂山産花崗岩を使用しているが、石壁幅が1.5mほどしかなく、他の地区よりも狭い。背後の粘土の幅は2.2mで、石壁と粘土は完全に接して一体化している。粘土内部は版築状構造で、砂と粘土との互層構造を呈する。1998年にも復元整備の目的で調査が行われている。(6)

**今宿地区** 長垂山の西側から今山まで続く砂浜沿いに築かれていたと考えられ、現在長垂海岸と今山地区が国史跡指定地となっている。調査例はなく、現況で松林の根元に石材が散在するのを見ることができる。

**今津地区** 防壁が最も良好に遺存する地区である。尾瀬門山から西に広がる大原海岸に沿って防壁線が延びており、その延長は約3kmに及ぶ。石壁の基底部幅は2.7~3.1mで、遺存高2.5~2.8m、側面に大型の石材を使用し、内部に小型の石材を用いて充填しており、粘土はほとんど使用していない。使用されている石材は尾瀬門山産の玄武岩、緑色片岩および西側の村子岳で産出する花崗岩が使用されている。(7)

以上の各地点の様相と、今回検出された土壁、石壁を比較した場合、土壁の構造は生の松原で検出された石壁の背面の粘土段に類似する。(8)しかし、生の松原地区の粘土段は石壁と一体化して構成される防壁の一部であり、今回検出された土壁とは異なる性質のものである。このため、土壁として存在する例は今回の検出例が初例となる。西側に隣接する史跡指定地でもこの土壁に類する遺構は確認されていない。

石壁部分については、粘土を内部構造としていることが西新地区の史跡指定地で調査された結果に類似するほかは、他地区で類似する構造をもつものはみられない。これは他の地区よりも石材産地に遠く、石材が不足するために内部は粘土と砂で空き固めたとする見方もできるが、博多地区で検出された石積みがもし防壁の一部であった場合、より石材産地に遠いと思われる地点での石積み内部が石を用いて充填されている状況であるため、内部構造については石材産地の遠近の問題ではない、別の要因があったと考えたほうが妥当であろう。

石材産地については、今回の調査地点で検出された大部分の石材の産地が今津・尾瀬門山東海岸であろうことは前章で述べたが、位置的には能古島の玄武岩、姪浜の砂岩、長垂山の花崗岩などの産地のほうはるかに近い。これらの石材を使用しなかった背景についても、防壁築造時の石材の需要と供給の実態が反映されているものと考えられる。

### 3.石壁と土壁の関係

石壁と土壁の二重構造は他の地域では見られない特殊な構造である。この二重の構造は、当初から意図されたものか、それとも遺構が重複して築かれた結果として、2つの同様な遺構が平行して検出されたものかなのか、それぞれの遺構の時期、位置関係を確認し、それぞれの意味、性質について検討する。

1トレント西壁で観察された土壁断面では、土壁基部部分の上に風成砂層が堆積し、その上に粘土と砂の混合層で石壁の上台部分を作り、その上に石積みを築いている(9)。2トレント東壁土壁断面でも、土壁の基部部分の上に粘土層が堆積しており、石壁はこの上に築かれていたものと考えられる。土壁の堆積状況から見ると、このように土壁の構築時期が先行し、石壁の構築時期は土壁よりも後の時期になる。正確には、土壁の土台部分が築かれてから、しばらくして石壁の土台部分が築かれているのである。

では、土塁が築かれてから石塁が築かれるまでの時間差はどれくらいあったのか。遺物などの具体的な時期を示すものはない。両者の時期差を示すものは、両者の土台のあいだに挟まった風成砂層の「厚さ」だけである。この風成砂層の厚さは、1トレンチ部分で30cm、2トレンチ部分で40cmで、ほぼ同じ厚さで一定している。この厚さについては、「比較的の短期間で堆積しうる厚さであるが、期間を明示するのは困難」とのご教示をうけている(\*10)。ここでは、とりあえず時間幅を数ヶ月～数年の幅で仮定することとする。

次に、土塁と石塁のそれぞれの構築時期を仮定してみる。文永の役（1274年）の時点で、博多湾岸に防塁に類する構築物があったとの記録はない。防塁に関する記録が初見されるのは1276年に石築地の建設を命じた文書による。その後、弘安の役（1281年）を経て室町時代に至るまで防塁の改修を命じた記載が散見される。当初防塁が構築された時期をそのまま適用すれば、土塁が構築されたのは1276年になる。しかし、このときの記述には「石築地」とあり、これは石塁と取るべきであって、この記述から土塁の構築を直接証明することはできない。

しかし上述したように、土塁が本来石塁の内部を構成するもので、側壁の石が除去されたものと考えれば土塁の構築時期をこの時点と考えることは可能である。同時に防塁の修理が築造当初から行われていた記述も存在することから、「数ヶ月～数年」後に構築された石塁は、修理の結果当初の防塁前面に新たに改良されたものを築造したと考えるのが自然であろう。

\*1 山内尊慈「西新防塁の土木工学的考察」「西新元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡市教育委員会 1970

\*2 平成12年度に福岡市教育委員会によって調査実施。平成13年度報告書刊行予定。

\*3 武谷水城「多々良以東元寇防塁有無に就いての補足」『筑紫史談』第25集 1925

\*4 平成11年度に福岡市教育委員会によって調査実施。

\*5 柳田純孝「元寇防塁と博多湾の地形」「古代の博多」1984

\*6 「国史跡 元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集 福岡市教育委員会 2001

\*7 「今津元寇防塁発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡市教育委員会 1989

\*8 特にA-11トレンチで検出された土層断面にみられる版築状構造は、今回検出された土塁の構造に類似する。「二和土」の技術が中世まで遡ることが一部で疑問視されているが（上記\*1など）、これらの例からみて鎌倉時代にこの技術が実用されていたことが確認できる。

\*9 本書P.14 Fig.6

\*10 西南学院大学 堀望氏のご教示による。

## 後記

調査終了後の11月12日に各新聞により調査結果の一部が報道され、今回の調査が一躍注目を浴びることとなりました。折りから、翌年のNHK大河ドラマが「北条時宗」と予告されており、元寇関係の遺跡の再評価の気運が高まっている時期だっただけに、あらためて市民の方々の関心の高さに驚かされた次第です。

調査後は記録保存にとどまる予定だった防壁遺構も、予想していなかった「第二の防壁」の出土でその重要性が高まり、最終的には建築予定の建物内部の中庭に移築・復元されることとなりましたのは、実際調査担当者にとっても検出された遺構と同様に予想外の展開でした。

西新学院の方々のご尽力によって、平成13年4月にオープンした展示施設は、同じ年に近くの百道浜で開催された「中世博多麗」とあいまって、市民の方に好評を得て、多くの方々にご来場いただき、市民の方に好評を得ていると聞いています。

復元された防壁は前年に整備を行った生の松原地区の防壁を参考としており、石の積み方や土壘の復元方法は築造当時の姿を再現したものです。実際に手が届く位置に復元されている防壁は市内でもここだけで、その大きさを体感することができるようになっています。

そして、復元された防壁をご覧になられると、その石積みの南西側の基段部分に、他の石とは趣の違う丸みを帯びた石が1~3段の高さで積まれているのを見ることができます。この部分が当時の石積みを移築した部分です。使用されている石は出土した石材をそのまま使用し、石の向きや位置関係は全て検出当時の状況に復元されています。なんとも目立たない石たちですが、この部分だけは、元寇当時の空気をそのまま伝えるものとして、今でも私たちに語りかけてくれています。

---

## 西新地区元寇防壁発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集

2002(平成14)年3月29日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 国崎美峰堂

福岡市東区箱崎1丁目20-5

---